

病虫害発生予報 第1号(4月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

＜予報の概要＞

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ	やや多 並	野菜全般	灰色かび病 アザミウマ類	並 やや多
タマネギ	白色疫病 べと病	多 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 ミカンハダニ	並 やや多 並
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病	並 やや少	カキ	うどんこ病	並
キャベツ	灰色かび病 コナガ	やや多 やや多	ウメ	かいよう病	並
キュウリ	べと病 褐斑病	並 並	果樹全般	カメムシ類	北部：やや多 中部・南部：少

気象予報

1か月予報(予報期間3月26日～4月25日 大阪管区气象台)

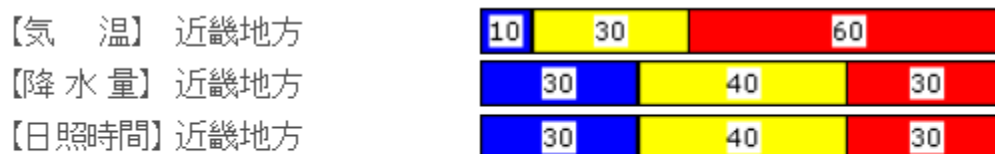
＜予想される向こう1か月の天候＞

近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
4月	和歌山 14.9	和歌山 100
	潮岬 15.7	潮岬 213

I . 水 稲

1. ヒメトビウンカ

- (1) 予報内容 発生時期 早い
発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市28.0頭、成虫率70%（平成8.3頭、成虫率29%）、紀の川市7.0頭、成虫率82%（平成8.8頭、成虫率16%）、かつらぎ町24.3頭、成虫率79%（平成3.5頭、成虫率18%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカは、イネ縞葉枯病ウイルスを媒介する。イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、休閑田や雑草地付近での育苗を避ける。
② は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。
③ 田植前および作期を通して、ヒメトビウンカの生息場所となる水田周辺雑草の除草管理を徹底する。

2. ツマグロヨコバイ

- (1) 予報内容 発生時期 早い
発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市3.7頭、成虫率100%（平成5.2頭、成虫率33%）、紀の川市0頭（平成2.7頭、成虫率6%）、かつらぎ町52.0頭、成虫率89%（平成9.7頭、成虫率48%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。

II . 野 菜

<タマネギ>

1. 白色疫病

- (1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は88%（平成18%）、発病株率は19.5%（平成1.2%）であった。
② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一のほ場内でも発病に偏りがみられることがあるので、ほ場全体を見回り発病が集中しているところは特に丁寧に薬剤散布を行う。
② 本年は発生が早いため、防除時期を早める。
③ 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。
④ 平成27年度病害虫発生予察注意報第2号（3月9日発表）を参照する。

2. ベと病

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は0%（平成6%）、新病斑の発生ほ場率は10%（過去9年の平均7%）であった。
② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① すでに本病の発生が認められるほ場または前年の発生ほ場では、4月上旬から薬剤防除を行う。また、発生が認められないほ場でも、周辺からの二次伝染が予想されるところでは予防散布を行う。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は39%（平成31%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。

② 多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は0%（平成5%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生初期から薬剤防除を行う。

<キャベツ>

1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は43%（前年0%）、発病株率5%（前年0%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 結球期に防除する場合、株元にも薬液がかかるように丁寧に散布する。なお、薬剤の使用時期（収穫までの日数）に注意する。

2. コナガ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は30%（平成0.4%）、1株当たり発生密度は0.04頭（平成0.001頭）であった。

② フェロモントラップによる3月1～20日の誘殺数は、紀の川市13頭（平成9.5頭）、和歌山市25頭（過去4年の平均7.8頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

<キュウリ>

1. ベと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は27%（過去6年の平均24%）、発病

葉率は2.0%（過去6年の平均4.2%）であった。

- ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。
 - ② 病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。
 - ③ 肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な肥培管理に努める。
 - ④ 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

2. 褐斑病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は36%（過去2年の平均24%）、発病葉率は7.2%（過去2年の平均6.3%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。
 - ② 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

<野菜全般>

1. 灰色かび病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は0%（平年2%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培トマトでの3月中旬の発生ほ場率は10%（過去2年の平均8%）であった。
 - ③ 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設内では湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。
 - ② 発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。
 - ③ 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

2. アザミウマ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培イチゴでの3月中旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ43%、ミカンキイロアザミウマ0%（平年0%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は、ミナミキイロアザミウマ40%（過去2年の平均25%）、ミカンキイロアザミウマ10%（過去2年の平均0%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 気温の上昇とともに4月上旬頃から密度が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 初発日 5月16～25日(並)
発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県予察ほ場(無防除区、有田川町奥)における春葉の越冬病斑の発病葉率は7.3%(平年15.9%)であった。
 - ② 前年10月中旬の春葉発病の発生園率は21%(平年15%)、発病葉率は0.8%(平年0.9%)であった。
 - ③ 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 罹病性品種や常発園では、罹病枝葉の剪除とともに防風施設の整備に努める。
 - ② 発芽前の薬剤防除ができなかった園では、新梢伸長期に銅水和剤(薬害軽減のための措置を講じる)を散布する。

2. そうか病

- (1) 予報内容 発生時期 並
発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
- ① 前年10月中旬のウンシュウミカンにおける果実発病の発生園率は9%(平年2%)であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 常発園および前年多発園では、越冬病斑の除去、発芽直後の薬剤防除に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県予察ほ場(無防除区、有田川町奥)における3月中旬の発生葉率は0%(平年0%)で、マシン油乳剤を散布している慣行防除区における発生葉率も0%(平年0%)であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達が問題となるため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 前年10月中旬の「富有」の発病葉率は36.5%(平年32.8%)であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。
 - ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
 - ③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

<ウ メ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 3月中旬の県予察ほ場（無防除区、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は0%（平年0.3%）であった。

② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生園率は29%（平年55%）、発病果率は0.6%（平年2.8%）であった。前年秋期の気象条件と併せて潜伏越冬病斑量は平年並と考えられる。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 強風雨により感染が助長されるため、常発園では防風施設の整備等の防風対策を励行する。

② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

< 果樹全般 >

1. カメモシ類

(1) 予報内容 発生量 県北部 やや多
県中部・県南部 少

(2) 予報の根拠

① 県北部29地点のチャバネアオカメモシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0.5頭（前年0.4頭、平年0.3頭）、捕獲地点率は31.0%（前年31.0%、平年17.3%）であった。

② 県中部・県南部18地点におけるチャバネアオカメモシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0頭（前年0.2頭、平年0.7頭）、捕獲地点率は0%（前年11.1%、平年23.9%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメモシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。

③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。

④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。

⑤ 平成27年度病虫害防除技術情報第6号（3月11日発表）を参照する。

⑥ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメモシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○ **農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○ **和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。